

## 内山雅生先生のご退職にあたって

内山雅生先生は、2013年3月末日を持って定年退職されることになりました。これまで何人か定年退職された先生方を見送ってきましたが、まだまだ現役でやれるのに・・・と思える方が何人もいました。内山先生もそのお一人です。内山先生は、2011年4月から国際学部長を務められましたが、就任当時も含め体調が優れなかった期間が短くなかったようで、学部長という激務を2年間続けられるのだろうか心配していました。定年まであと3か月少しとなりましたが、最近の学部長は、学部長就任当時よりも一見お元気のように見えます。ただしそれは、学部長としての責務を全うするために、おそらくご自身を絶えず奮い立たせている結果であって、ずいぶん無理をされてきたのではないかと思います。まずは、宇都宮大学国際学部、国際学研究科に対する内山先生の長年の貢献に対して御礼申し上げるとともに、心よりお疲れ様と申し上げたいと思います。

内山先生は、1947年5月、静岡県田方郡函南村でお生まれになりました。幼少期、学歴期、高校では、どんな学校生活を送っていたのでしょうか。教員に噛みつくような児童生徒だったのでしょうか。それとも、現在のご様子からは想像もできない、案外おとなしい児童生徒だったのでしょうか。やや矛盾した言い方になってしまいますが、内山先生のご退職は残念でありませんが、最終講義は非常に楽しみにしています。内山先生の口癖の一つは、「話し出したら止まらない」、「何時間でも話せる」です。研究者として、教育者として、組織運営の仕事に関わってきたものとして、おそらく「伝えたい」「ぶちまけたい」「叫びたい」ことが山ほどあるはずです。最終講義に内山先生が何を話されるのか、とても楽しみです。そして、1時間半という一般的な講義時間の枠でお話いただくことには無理があるのではないかという気がしますが、それはその時の状況で臨機応変に・・・

話を戻しますと、内山先生は、1970年3月に東京学芸大学教育学部をご卒業になり、1975年3月に明治大学大学院文学研究科修士課程を修了し、文学修士（明治大学 文第30号）を取得されました。1980年3月には明治大学大学院文学研究科博士課程を単位取得満期退学されました。1980年4月から2年間、日本学術振興会奨励研究員を務められた後、1982年4月に金沢大学経済学部に着任されました。その後、1984年6月に金沢大学経済学部助教授、1991年4月に金沢大学経済学部教授へと昇進されています。1992年3月には、博士（史学）（明治大学 文第17号）を取得されました。

内山先生は、1994年4月に宇都宮大学の教養部教授として赴任されました。旧教養部から国際学部へ改組されたことにより、同10月には国際学部教授となっています。2000年から2004年3月まで宇都宮大学評議員を二期務められました。この間、財団法人東洋文庫兼任研究員を2002年4月から現在まで務められました。また、2006年4月から2008年3月まで、科学研究費補助金第1段階審査委員を務められています。

内山先生のご専門は、中国近現代史、中国社会論です。長年中国研究に心血を注いでこられた研究成果については、著書24編、論文31編、報告・評論16編等が示されている主要業績をじっくりとご覧ください。自分は中国には門外漢なので研究面でのコメントなどは何も申し上げることは出来ませんが、業績一覧を改めて拝見して、内山先生の研究に対する熱意や情熱の一端を感じると同時に、自分自身を振り返り身を引き締める思いになっています。1990年から継続的に科学研究費の採択を受けてきていますが、これも先生の研究が高く評価されてきたことの証しと言えると思います。

内山先生の大きな特徴は、「声の大きさ」です。たまたま国際学部A棟5階に部屋を連ねる者として、ゼミの様子やゼミ室から聞こえてくるのが何度かありましたが、非常に厳しい内容のコメントを5階全体に響くような大きさと怒鳴るように話す先生の声が聞こえてきました。あのコメントやゼミに耐えた学生たちはさぞ鍛えられて卒業したと思います。これまで機会はありませんでしたし、今後もないかもしれませんが、カラオケでもマイクは不要と思います…このような文章を書いていると、どのような中国の歌を歌われるのか、聞いてみたくもなりました。

もう一つ、内山先生は事あるごとに、大学人の成果は「研究で問われる」、「大学法人化以降の大学の研究レベルは確実に下がっている」、「大学が生き残れるかどうかは研究のレベルで決まる」というように、何よ

りも研究の重要性を強調されてきました。自分はここ数年地域貢献のプロジェクトにかなりの時間と労力を使ってきました。内山先生には、その点の重要性はお認め頂きつつも、それを研究に活かせ、研究として集大成せよという叱咤激励を受けてきました。いつになるかは分かりませんが、「田巻もまあまあ研究やっているじゃん」と言わせるようにしたいと内心想っています。

内山先生が国際学部長を務められた2年間は、学部改組に向けた準備と全学および全国的な大学改革あるいはグローバル人材育成などが重なった、まさに激動の2年間だったと思います。内山先生には、宇都宮大学のなかで一番小さな国際学部がどうやって大きな存在意義・価値を示しながら発展していくのかという課題に常に向き合っていただきました。そして、退職を控える自分がリードするのではなく、今後の学部を支える教員が遠慮のいらぬ話し合いの中で構想を具体化していくことが重要だとのスタンスで学部運営をされてきたと思います。まだ学部の今後については明快な方向性は見えていませんが、学部長を中心に話し合ってきた内容を活かしながら、より良い学部を構築していくことは、われわれみんなの責務と言えるでしょう。

内山先生には今後も国際学部を暖かく見守っていただきたくお願い申し上げます。

「内山先生のご退職にあたって」の表題に向き合いながら、思いついたことを書き連ねたような文章になってしまいましたが、まずはご健康に留意されて、国際学部の軛から解放されたエネルギーを多方面でご発揮下さい。またいつか、お会いできることを心より楽しみにしております。

国際社会学科長 田 巻 松 雄